

ラヴィルマルケとリユーゼル（六）

—— いわゆる「バルザズ・ブレイス論争」について ——

梁 川 英 俊

XI 「バルザズ・ブレイス論争」の進展

収集家ジャン・マリー・ド・ペンゲエルン

リユーゼルの歌集はブルターニュにおいて、とりわけラヴィルマルケの信奉者たちの間に少なからぬ物議を醸し出した。『バルザズ・ブレイス』をブルターニュに対する愛国心の拠り所としていた人たちにとって、それは祖国を汚す性質の悪い露悪趣味としか映らなかつたのである。しかしリユーゼルの方から見れば、彼の民謡集はただ単にブルターニュにある現実の歌の反映にすぎず、不自然なのはむしろラヴィルマルケが集めた歌の方だった。なにしろ、リユーゼルはそうした歌の多くにいまだかつて出会つたことすらないと主張していたのだから。

では、ブルターニュの他の収集家はどうだったのだろうか。もちろん、当時のブルターニュにはラヴィルマルケやリユーゼル以外にも歌の収集家がいた。彼らはラヴィルマルケの歌集をどのように評価していたのか。いや、そもそも彼らはどんな歌を集めていたのだろうか。まずはブルターニュにおける民謡収集の歴史を簡単に振り返ってみたい。

ブルターニュで最初に民謡収集を行ったのは『フィニステール県旅行記』の著者ジャック・カンブリーだった。彼の旅行の目的は表向きには大革命後の破壊活動の調査であったが、その裏には「オシアン風の古歌」の発見といういまひとつの目的が隠されていたのである。その後、一八一〇年代から二〇年代にかけて、民謡ブームは主にブルターニュの貴族階級のあいだに広がって行く。のちに『ケルラスの跡取り娘』*L'héritière de Keroulas*として広く知られることになるバラードの歴史的な起源を跡づけたエマール・ド・ブロワ Aymar de Blois、トレゴール地方で十六世紀の歌を収集したジャン・フランソワ・ド・ケルガリウ Jean-François de Kergariou、女性収集家バルブ・エミリー・ド・サン・プリ Barbe-Emilie de Saint-Prix、聖人の歌を集めたダニエル・ルイ・ミオルセック・ド・ケルダネ Daniel Louis Miorcec de Kerdane、ラヴィルマルケの母親ユルスル・フェドー・ド・ヴォージャン Ursule Feydeau de Vaugien 等、この時代に収集を始めた人は少なくない。もつとも彼らにとって歌の収集はあくまでも趣味の一環であり、自分のコレクションを世間に公表しようとする者はほとんどいなかった。実際、一八三四年にエミール・スーヴェストルが『両世界評論』に「ブルターニュの民衆詩」を掲載するまで、ブルターニュ民謡はフランスでその存在を広く知られることはなかったのである。

ラヴィルマルケやリユーゼルの同時代人で、代表的な収集家といえばジャン・マリー・ド・ペンゲェルン Jean Marie de Penquern だった。一八〇七年にパリで生まれた彼は、夭折したリユーゼルの叔父ルユエルーと同年、ラヴィルマルケよりも八歳、リユーゼルより十四歳年長であった。ブルターニュとパリで教育を受け、四〇年代からは弁護士としておもにラニオンに住んだが、パリではラヴィルマルケにも大きな影響を与えたオーギュスト・グルキュフやクルシー兄弟などと親交を結び、おそらくは彼らの影響で一八三〇年代から民謡の収集を始めたらしい⁽¹⁾。その旺盛な好奇心によって収集の対象とされたものは、民謡のみにとどまらずメダルや貨幣などにも及び、自宅はさながら一個の博物館であったという。ペンゲェルンが生涯に集めた民謡の数はおよそ六〇〇篇⁽²⁾。そのうち生前に発表されたものはごくわずかだった。

しかしそのコレクションは生前から有名で、一八三五年には『バルザズ・ブレイス』の準備をしていたラヴィルマルケが彼のもとに訪れて助言を乞うていたし、完成した歌集の「序文」はグエンフランによる歌の断片の発見者としてその名を記載していた⁽³⁾。

それにしても、これほどのコレクションをもちながら、彼はなぜそれを発表しようとしなかったのだろうか。もちろん、ただ単に機会に恵まれなかったということもあったろう。たとえば、彼は一八四〇年代に公教育相のサルヴァンデーの下で行われた全フランスを対象とする民謡集の計画にも参加していたが、このときは歌集そのものが陽の目を見なかった⁽⁴⁾。一八四八年、彼はラヴィルマルケにこう書いている。「私たちはもう少しで自分たちの歌を印刷させるところでした。(……) スーヴェストルは大臣のサルヴァンデー氏から重要な著作を任されていました。そこにはフランスのあらゆる地方、あらゆる言語、あらゆる方言で歌われる民謡が網羅されるはずだったのです。(……) スーヴェストルはケランブランと私に、この慎ましやかなトレギエの地を任せました。二年間にわたって、私たちは歌を採取し翻訳し註を付し、準備万端でした。しかし、革命が起きてすべてを台無しにしてしまったのです⁽⁵⁾」。

もつとも、ペンゲェルンにその気があれば自分で発表することもできただろう。現にこの手紙には「自費でも出版するつもりだ」と書かれていた。しかし、結局歌集は出なかった。明らかに、彼は自分の歌の出版に積極的ではなかったのである。なぜか。同じ手紙で彼はラヴィルマルケにこう言っている。

こうした歌は、文学的な点ではあなたの歌ほど関心を引くものではありません。われわれのみじめなトレギエ方言はいまや乱れきって情けない状態にあります。だからといって私たちは一切手直しをすることはしません。あなたの後で落穂拾いをしたわけですが、私たちの集めたものはそれほど悪いものではないように思われました。(……) とく

に幾つかの作品は本物の歴史的価値をもっているように思えます。もしそれが幻想にすぎなくても、私たちはその幻想で二年間愉しんだということになりますから(6)。

ペンゲエルンが歌を出版しなかった裏には、おそらく自分の歌がラヴィルマルケのそれにはるかに及ばないという自覚があった。彼は『バルザズ・ブレイス』の後で自分の歌を発表する意味を探しあぐねていたのではないか。たとえば、この手紙の八年後、彼は同じラヴィルマルケに向けて次のように書いている。

あなたは類稀な才能と類稀な幸運とでわれわれの詩的伝承を採られたのです。

私が求めているのは歴史的伝承だけです。

われわれの国では何事も忘れられず、その口頭伝承にはいまだにわれわれの歴史がまるごと含まれていると確信して、私はそのばらばらの断片を集めようと企てたのです。(……) 私はこの仕事を二〇年以上続けてきましたが、華々しい発見も詩的な発見も何もありませんでした。(……) あなたの見事なまでに完璧な「レズ・ブレイス」や「ノミノエ」の詩の側では、それはどんなふうに見えるでしょう(7)。

ペンゲエルンは『バルザズ・ブレイス』の歌の素晴らしさを讃える一方で、自分が収集した歌を卑下することしかできない。しかしその一方で、彼の書簡はまた、ラヴィルマルケとは明白に異なる彼の民謡収集に対する独自の姿勢をはっきりと伝えていた。なによりも、彼は収集した歌に手を加えることを一切認めなかった。たとえば、彼は歌を手直しかつとで知られていたスーヴェストルについて、ラヴィルマルケにこう語っている。「私はまだスーヴェストルに完結したも

の、仕上がったものはなにひとつ送っていません。(……) もしスーヴェストルが彼が文学的なブルトン語と呼ぶものによって、こうしたテキストを補完することに興じたり、一語でも手直ししたり体裁を整えたりしたならば、その仕事は私の流儀にまったく反するものになりますから、とても署名をすることはできません⁽⁸⁾。

見ての通り、ペンゲルンはその収集方法においては、明らかにリューゼルの先駆者だった。しかも、彼がここでスーヴェストルについて語っていることの大半は、そのままラヴィルマルケに向けて語られてもいいものであった。にもかかわらず、ペンゲルンはそれをしなかった。それは、おそらく彼が重視したのが歌の歴史的価値であり、文学的価値ではなかったということが大きかったのだろう。ラヴィルマルケ宛の書簡にもはっきりと述べられているように、ペンゲルンにとって民謡とはなによりもまず歴史的な資料であった。彼の民謡収集を支えていたのは、ブルターニュ民謡がこの地方の歴史を伝えているという信念だったのである。そしてこの信念を共有するという点において、ペンゲルンとラヴィルマルケの間にはいかなる径庭もなかった。彼が『バルザズ・ブレイス』の完成度に疑念を抱くことがなかったのも、おそらくそれゆえだったろう。

もちろん、時代的な理由も考慮しなければならない。この手紙が書かれたのは一八五〇年代半ば、ラヴィルマルケがさまざまな社会的榮譽に恵まれ、まさに栄光の絶頂にあつたときであつた。当時はリューゼルでさえ、まだ『バルザズ・ブレイス』の熱烈な信者を自認していたのである⁽⁹⁾。ペンゲルンの書簡がブルターニュの歴史にとって価値ある発見をした後輩への率直な敬意に溢れていたとしても、無理はなかったのである。

ペンゲルンはこの手紙の二年後、一八五七年にまだ四〇代の若さで死去する。もう少し長生きしていれば、彼が収集した歌に「華々しい発見」や「詩的な発見」がないのは、自分のせいではなく、ラヴィルマルケせいだと考えることもできたかもしれない。あるいはまた「バルザズ・ブレイス論争」で、反ラヴィルマルケ陣営の重要な一員としてそれなりの

役割を果たしていたということも十分に考えられる。少なくとも残された書簡はその可能性を示唆する。

ともあれ、彼が残した六〇〇篇を越える歌は、その内容においてラヴィルマルケのそれに遠く、リユーゼルのそれに近かった。そして、この事実がリユーゼルに優位に働かないはずはなかった。その証拠に、彼のコレクションはその後ラヴィルマルケ、リユーゼル両陣営の激しい争奪戦の対象となった。次にその経緯を見てみたい。

コレクションの争奪戦

ペンゲルンの死後、そのコレクションは語られること多く知られること少ない資料として神秘のベールに包まれる。それがはじめて人々の前に姿を現わしたのは、著者の死から十一年を経た一八六七年のことだった。ペンゲルンの未亡人が、参事会員のダニエル神父にその売却を依頼したのである。その年の六月、リユーゼルはルスクールから手紙を受け取り、このコレクションを獲得するつもりだと知らされる。ルスクールはこう書いていた。「誰も見たことのなかったこの謎のコレクションについては多くのことが語られてきましたが、ようやく歴史的・文学的な重要性という視点からこの巨大なコレクションを捉えることができるようになるのです。(……) 最初の歌集を出版する前に、できるだけ早くこのコレクションに目を通した方がいいと思います⁽¹⁰⁾」。

しかし、リユーゼルはこのルスクールの助言には従わず、またその後彼から舞い込んだコレクションを共同購入しようという誘いにも乗らなかった。結局、ルスクールはこの貴重な資料を獲得すべく、ラヴィルマルケとアレガンに協力を仰いだ。コレクションは一八六七年十月、サン・ブリューで行われた国際ケルト大会の際に一般公開され、ラヴィルマルケやミリンをはじめ少なからぬ人が閲覧に訪れたという。しかし、リユーゼルはそこにも足を運ばなかった。ところが、彼はこの大会が終わるや、それまでの無関心な態度を一変させ、コレクションの獲得を目論んでいたデュ・クルジューなる

人物にこう問いかける。

ところで、あの「ペンゲルンの手稿」事件には解決ができましたか。私としては、コート・デュ・ノール県で収集されたこの貴重なコレクションがわれわれの県を離れて欲しくはないのですが。たとえば、サン・ブリュー市はなぜその獲得のために動き出さないのでしょう。もうひとつ、これなら私が参加してもいいと思っているやり方があります。私たちが二、三、四人あるいは五、六人で手を組んで、私たちの文学の歴史にとって大変に重要なこの手稿が、われわれの県と関係がなく、またあまり信頼できそうもないよそ者の手に渡らないようにするのです。(……) 私が提案しているやり方が上手くいきそうな場合でも、私はこの二五年間に自分で集めた歌以外は使わないつもりです。(……) ペンゲルンのコレクションは将来、単独で出版の対象となるでしょう⁽¹¹⁾。

リユーゼルがペンゲルンのコレクションに無関心を装っていたのは、おそらく自分の歌集の出版を目前にして剽窃の謗りを恐れたためであった。そして、にもかかわらず彼がその獲得に動き出したのは、それが「あまり信頼できそうもないよそ者」、すなわちラヴィルマルケ一派の手に渡らないようにするためだったのである。さて、手紙を受け取ったデュ・クルジューは翌六八年一月、ペンゲルン夫人と直接交渉して三〇〇フランで手稿の所有者となる権利を獲得し、リユーゼルを共同購入者として迎え入れる。リユーゼルは彼にこう書く。「これでコレクションは私たち二人のものです。(……) それにしてもラヴィルマルケとルスクールとアレガンの三人組は何と言うでしょう。彼らは大声を上げ、私たちが彼らを騙したと言うことでしょう。とくに私は彼らと協力することを拒んだわけですから⁽¹²⁾」。

リユーゼルの予想通り、この結果はルスクールの反発を呼ぶことになった。彼はすぐにデュ・クルジューに宛てて、自

分は一八六七年一月十日以来、ペンゲルンのコレクションの買主であると主張した。それをサン・ブリューの会議のときに一般公開したのは、ペンゲルンの遺族のためにコレクションの宣伝が必要だと考えたからであり、これまでその購入を控えていたのは、他の人がどう評価するかを見て、しかるのちにそれを上回る金額を支払おうとしていたからだというのである。ルスクールはさらにこう書いていた。

私がその買主になったとき、ラヴィルマルケには不当かつきわめて不公正な戦いが仕掛けられており、いまにも粉碎されそうな気配でした。(……) 彼らはこのコレクションのなかに、われわれのブルターニュの歌と決着をつけるための武器を見つけ、そうした歌からそのナショナルで宗教的な性格を除去し、なによりもそれを集めて出版して輝かしい名誉を得た人を粉碎しようと考えているのです。(……) ダニエル氏はあなたが意気揚々とコレクションを持ち去ったのは、表向きは自分のためだが、実際はたぶん意図的にはなからうがルナン氏とその弟子たちのためなのだ、と正直に話してくれました⁽¹³⁾。

ペンゲルンのコレクションをめぐる争奪戦の背景にあったのは、おそらくサン・ブリューの会議においてルメンの『カトリコン』の序文がもたらした衝撃であった。明らかにルスクールは、そこで表舞台に現れた『バルザス・ブレイス』の敵対者にこのコレクションが有効な武器を与えることを危惧していた。彼にとってこのコレクションの獲得は『バルザス・ブレイス』の価値を守ることと同義だったのである。一方、リューゼルが恐れていたのは、それがラヴィルマルケの信奉者たちの手に渡って改竄されることであつた。

ところが、事情に疎いデュ・クルジューは、あろうことかルスクールにもコレクションの共同所有者にならないかと声

をかける。そればかりではない。彼はまたラヴィルマルケに対してもコレクションの出版への協力を依頼したのである。すでにルスクールからコレクションの共同所有者になることを打診されていたラヴィルマルケは、このデュ・クルジューからの手紙に率直に不快感を示し、出版への協力については消極的にこう語った。

ブルターニュの名誉になるような書物には精神的な協力を惜しみません。著者によつて集められ、死後公にされた膨大な歌に注釈をつけるといふのは大変な作業であり、私は尻込みしてしまいます。それぞれに大きく異なるさまざまなヴァージョンからひとつのテキストをつくり、これまでその一部しか翻訳されていない歌を全部翻訳するだけでも相当なことでしょう⁽¹⁴⁾。

一方、ラヴィルマルケすらをも巻き込もうとする、このデュ・クルジューの姿勢に驚いたリユーゼルは、慌てて彼に本音を告げる手紙を書き送る。「私はとことん誠実でありたいし、私の行為の決定的な理由のひとつは、この資料がド・ラヴィルマルケ氏の手に落ちるのを見たくなかったからだと言いたいのです。そうなれば、彼は『バルザズ・ブレイス』で使った方法をそれにも適用することになるでしょう。この歌集だつて三五年前にはいまよりまともだったかもしれないのです。(……)これまでのことを考えても、私はラヴィルマルケがペンゲェルンの原稿の出版に関わることには絶対に反対です⁽¹⁵⁾」。

たしかに先に引用したラヴィルマルケの書簡から判断する限り、このリユーゼルの危惧は当たっていたと言えよう。ラヴィルマルケはこの時代にあつてもなお、『バルザズ・ブレイス』の方法に固執し、新しい批判的な方法に対しては否定的だったのである。したがつて、この二人がもしペンゲェルンのコレクションを別々に出版していたら、その内容はまったく異

なったものになっていったことだろう。ちょうど『バルザズ・ブレイス』とリュウゼルの歌集の間に見られるのと同じような対照が、そこにも現れていたに相違ない。このコレクションをめぐる争奪戦が、そのままラヴィルマルケとリュウゼルの両陣営の争いとなったのも、理由のないことではなかったのである。

では、この争いの結末はどうなったか。最後にコレクションの所有者となったのは、意外なことにアレガンだった。いかなる経緯でか。一八六八年三月、アレガンはわざわざリュウゼルのもとを訪れて、コレクションの三番目の共同所有者になりたいと申し出た。リュウゼルとデュ・クルジューはこれを認め、手稿はアレガンの手に渡る。が、その後コレクションが出版される気配はまったくなかった。それどころか、三年後の一八七一年、リュウゼルはデュ・クルジューに宛ててこう書く。「ご存知の通り、私はこの素晴らしいコレクションを遠くからでも見たことすらありません。二年前、いくらそれを出版に利用しないと心に決めたとはいえ、少しそれに鼻先を突っ込んでみたくなって、わざわざシャトーランに行こうとしたことがありましたが、博士にそれを話すや、彼はすぐに田舎に行かねばならない用事ができたと言って、出かけてしまったのです」。リュウゼルは続けて、博士とはこの二月にもカンペールで会い、コレクションの一部である聖史劇の写本を貸してくれと頼んだが、一週間ほどで送ると言いながらひと月以上も届かない、と不平を漏らす。「そこで私は博士に宛てて、私のコレクションの所有権がこうしたやり方のせいで、虚しく、馬鹿げたものにさえなってしまったので、これに決着をつけるべく、コレクションをどこかの公立図書館に預けるか、百フランで私の所有権を買って欲しいと申し出たのです⁽¹⁶⁾」。

この申し出に対するアレガンの答えは、百フランの紙幣であった。彼はほどなくデュ・クルジューからも所有権を譲り受け、このコレクションのただ一人の所有者となった。とはいえ、彼がこの資料をどのように使ったのかは詳らかではない。知られているのは、一八七八年にそれを国立図書館に預けたことだけである。手稿には聖職者を侮辱する内容の歌も幾つか

含まれていたが、それらはペンゲルン夫人からコレクションの売却を依頼されたダニエル神父によって廃棄された可能性が高いという。それ以外の資料はガンガンのラングラメ神父の所有であつたが、これもものに国立図書館が購入した。以来、ペンゲルンの膨大なコレクションの大半は、いまなお図書館の棚の上で眠っている。

『バス・ブルターニュ地方の民衆歌』以後のリューゼル

さて、ブルターニュではさまざまな形でボイコットの対象となつたリューゼルの『バス・ブルターニュ地方の民衆歌』であつたが、パリから聞こえてくる反応には好意的なものが多かつた⁽¹⁷⁾。たとえば、歌集の仮綴本を献呈されたサント・ブーヴは八月十八日付で著者を勇気づけてこう書き送つていた。「あなたが大変人気のあるあなたの先駆者の一人についてお書きになっていることで、私にとつて驚くべきことはまったくありません。私は彼を非常に早くから、ちょうど彼が研究を始めた頃から知っていますが、その正確さやそこにある批評精神を信用したことは一度もありませんでした。(……) 私はあなたに有能な批評家が欠けていることはないと思いますし、このアカデミー会員との戦いで、あなたは自分が思っているほど孤独ではないはずです⁽¹⁸⁾」。

一方、ルナンからの支持も相変わらずだつた。彼は一八六八年九月四日発行の『ジュルナル・デ・デバ』にリューゼルの歌集の書評を掲載した。この書物の研究史的な価値を明確にした簡潔にして要を得たその内容は、しばらく引用するに値する。

民衆詩に関心をもつ人たち、またケルトの昔の遺物を探している人たちには、リューゼル氏によつて採取・翻訳された『バス・ブルターニュ地方の民衆歌』を強く勧める。ここにあるのは、いかなる修正も施さず、民衆歌手の唄つたままリユー

ゼルによつて書き写され、伝承が伝えるあらゆるヴァリアントとともに提出された、絶対的に誠実なテキストである。リュール氏はその気配りを、それぞれの歌を唄ったブルトン人の老人たちの名前や住所を書くところまで徹底させる。だから、しようと思えば、実際にそこに行つて同じ歌を聴くこともできるのである。こうした慎重さはどれも民謡というデリケートな素材を扱うときには不可欠なものだ。そこでは疑念がもつともらしく差し挟まれ、暗示がさまざまな表現形式をとり、贋作がまことに容易に入り込むのだから。リュール氏の考証はその転写が正確であるのと同じくらい穏やかなものだ。大袈裟な注釈もなく、自分の見つけた歌の価値を高めるべく歴史的な暗示を求めようとすることもなく、歌の古さを誇張するような傾きもなく、先人を批判するときには控えめこの上ない。たしかに、もっと学識があつてもいいし、比較の事例もより豊富であつていい。(……) しかし、それは大したことではない。収集家と碩学の役割がはっきりと別れていることは、考証にとつては好ましいことでさえあるのだから。それによつて不正行為が防止し易くなるし、こうした分野で幾つかの誤りがあることは、しばしば真正さの証拠でもあるのである。重要なことは、読者と民衆の間に一切の文学的意図が介在しないのが確実だということなのだ。この絶対的な善意がリュール氏の仕事に高い価値を与えるのである⁽¹⁹⁾。

また、リュール氏は翌六九年に歌集出版の功績によつて碑文文学アカデミーから五〇〇フランの金メダルを授与されたが、これも同アカデミーの副会長であるルナンの尽力によるところが大きかった⁽²⁰⁾。さらに彼がこの頃アンリ・ゲドス Henri Gaidoz と交流をもち始めたのも、ルナンの紹介がきっかけだった。一八七六年から高等研究実習院 *Ecole pratique des hautes études* の教壇に立ち、フランスのケルト学に大きな影響力をもつことになるこの俊才は、以来自分より二〇歳以上も年上のリュールと毎週のように書簡を交わすのみならず、一八七〇年に『ルヴュ・セルティック』*Revue celtique*、七八年には『メリュジーム』*Melusine* を創刊し、ブルターニュでは孤立していたこのフォークロリストに貴重な発表の機会を提供する

ことになる。

一方、歌集が出版された一八六八年、リユーゼルの生活には大きな転機が訪れる。六四年から勤務していたロリアンのコレージュがこの年の新学期からリセへと変わり、それに伴って職を失ったのである。民謡集の出版によって乏しい蓄えがほとんど底を尽いていたときに、唯一の収入源を失った痛手は小さなものではなかったろう。しかし、一方でそのままりセの教師として雇用されて負担が増えることを恐れていた彼は、事態をそれほど悲観的には受け取らなかった。彼はルナンにこう書く。「たぶん、これでいま申請している助成金が獲り易くなるでしょう。休暇の問題が解決してしまつたのですから⁽²⁾」。実際、彼が一二〇〇フランの助成金を獲得したという連絡を受け取つたのは、その数日後のことであつた。しかも、助成金の受給は以後七四年まで連続して続くことになるのである。

では、その助成金でリユーゼルは何をしようとしていたのか。彼が望んでいたのは収集対象に新たに民話を加え、調査範囲を故郷トレゴール地方からブルターニュ全土にまで広げることであつた。とくに民話の収集については、ルナンに対して「グリム兄弟がドイツのためにしたことをブルターニュのためにする」とその意気込みを語っていた。もつともその意欲とは裏腹に、トレゴール地方を除いて踏査の結果ははかばかしいものではなかつた。一八六九年二月、レオン地方から戻つたリユーゼルはこう書く。

この地方は、他の点ではけつこう面白いのですが、口頭伝承や歌や民話などに関しては、さほど大したことはありません。そこで採取したそこそ重要な歌で、トレギエ地方で見つけなかつた歌はありません。またその民話や物語には、風俗や言語の面でラブレール風の放縦があるのを発見してびっくりしました。というわけで、ほとんど時間を無駄にしたも同然です。(……) まったく、われらがトレギエ地方万歳です。まさにわれらがバス・ブルターニュ地方のアッティカで

す。そこでは民話や民謡が豊富で、冬の炉辺に皆が集まったときに誰かがそれを語っても、一人として顔を赤らめる者はいないのでから。それにわれらがトレギエの語り部は、他の地方の語り部よりも、語りのなかに一層の正確さと秩序と生命力とを持ち込むのです⁽²²⁾。

故郷を離れたリューゼルが逆に発見したのは、自分の住む土地の口承文化の豊かさだったのである。彼はそれをさまざまな機会を捉えて強調することを止めなかった。たとえば、一八六九年七月十五日付のルナン宛の手紙で彼はこう言っていた。「私の収集はほぼ終わりに近づいています。(……) 鉦脈はまだまだ掘り尽くせない。私はあらゆる種類の民話や物語を一〇篇ほど集めました。あちこち歩き回りましたが、おもに私たちの土地であるトレギエで採集したものです。そこでは、民話や民謡などの口頭伝承がブルターニュの他の地方とは比較にならないほど多く、また面白いのです⁽²³⁾」。

一方、他の地方に関しては、レオンであれモルビアンであれ、彼が強調するのはその成果の貧しさばかりであった。なかでも評価が厳しかったのは、ラヴィルマルケの故郷コルヌアイユ地方であった。彼はこう言っていた。「私はわざわざド・ラヴィルマルケ氏の地方にも出かけてみました。ニゾン、メルグヴェン、バナレック、スカエ、サン・トユリアン、ポンタヴェンとその近郊です。私は行く先々で、農民や村のヴァイオリン弾きや乞食に訊ねました。結果はどこでも芳しくなく、『バルザズ・ブレイス』の著者にとって不利なことばかりでした。私はこの地方が口頭伝承に乏しいことに大変驚きました。ド・ラヴィルマルケ氏がそこで採集したという貴重な歌の幾つかについては、私はまったく何の痕跡も見つけることができませんでした⁽²⁴⁾」。

しかしながら、こうしたリューゼルの認識には疑問の余地も多くあった。というのも、たとえ同じブルターニュであれ、トレゴール地方の人間がそれ以外の地方で収集活動をするのは、そもそも容易なことではなかったからである。まず話され

ているブルトン語が違った。加えて、トレギエ地方で調査をするときには、リユーゼルには親類縁者をはじめ頼りになるつてが多くあった。たとえばリユーゼルの収集にとって、その家族、なかでも妹のペリーヌの献身的な協力は不可欠のものであった⁽²⁵⁾。こうした協力が一切期待できない土地で調査が困難になったとしても、それは当然のことだったのである。リユーゼル自身、こう言っている。「私がトレギエ地方にいるときには、しばしば親類や友人の家にお世話になり、支出も軽減されたものです。が、知己のいない地方では、事情は異なるでしょう。つまり、与えられるもので満足しなければならないでしょう⁽²⁶⁾」。

その言葉通り、リユーゼルの調査は自分の故郷以外ではおぼろげな感をもたぬものだった。たとえば、一八七〇年二月、ブレストにいた彼はルナンに宛てて、三ヶ月前からオ・レオン地方とバ・レオン地方の調査を始めているが、故郷に比べて口頭伝承に大変乏しいと嘆いていた。が、実際には彼は大半の時間をブレストで過ごし、出版すべき民話集のための編集と翻訳の作業を行っていたのである。同じ頃、ミリンやトルードがブレストの船員たちから多くの民話を採取していたことを考えても、このリユーゼルの認識が客観性を欠くものであることは明らかだった⁽²⁷⁾。さらに同じ手紙で彼はまた、コルヌアイユ地方における調査が成果の乏しいものであったことを強調していたが、この発言もそのまま受け取るにはいささか無理があった。というのも、そこで調査地として挙げられていたのは、カレーやロストルナン、カンペールなど町の名前ばかりだったからである。フランス語の侵入によってブルトン語が町からあらかた駆逐されてしまっていたこの時代、そうした場所ですら有効な調査が可能であったのか、はなはだ疑わしいと言わざるを得ない。

ともあれこの一八七〇年、リユーゼルは民話収集の成果の一端を、カンペールのクレレ書店より『ブルターニュの民話』*Contes bretons* という一冊の民話集にまとめて世に問う。収められた六篇の民話のうち三篇がブルトン語とフランス語のバイリンガル、残りはフランス語のみによる出版だった。普仏戦争が勃発したこの年、リユーゼルは本気でパリの国民義勇軍

に参加することを考えていたという。この国民的悲劇を前に「バルザズ・ブレイス論争」は長い休戦期間に入る。議論が再び活発化するのはその一八ヶ月後、きっかけは一八七二年にサン・ブリューで開催されたフランス学者協会 *Sociétés savantes de France* の年次大会であった。

サン・ブリューの「フランス学者協会」年次大会

フランス学者協会は、一八七二年七月にサン・ブリューで開催される年次大会のプログラムに「ブルターニュ民謡の真正性」という論題を設け、その発表をリューゼルに依頼した。それは彼にとって公の場で『バルザズ・ブレイス』を論じる初めての機会となるはずであった。発表に先立ってリューゼルは、同年四月十八日、そこに至った経緯と発表の内容を簡略に記した手紙をブレストからラヴィルマルケに宛てて送る。以下、その前半部分を引こう。

私がこの手紙を書くのは、礼節と公正さのためです。

ご存じのように、今年サン・ブリューで開催されるフランス学者協会のプログラムのなかに、「今日までのブルターニュ民謡の真の歴史をつくること」という論題があります。

この題目を見たとき、私はすぐにそれが自分に向けられたものだと思います。そして、最近サン・ブリューから送られてきた手紙を読む限り、それは間違いではありませんでした。いずれにせよ、私は一ヶ月以上大会の主催者に手紙を書くのを控えていました。誰か他の人がこの問題について話すべく登録してくれないかと思っていたのです。そうなれば、討論の際にでも、時宜に応じて必要を見て口頭で私見を延べればいい、とそう考えていました。彼らが伝えてきたのは、まだ誰も登録していないので私に期待しているということでした。そこで、私はその論題について一文を読み上げましよ

うと申し出たのです。

フランスやドイツやイギリスで、学界の有力誌への掲載を約束するからということ、このテーマについて詳しく敷衍しながら論じて欲しいという申し出が、これまでも幾度ありました。が、私は今日までそれを固辞してきました。(……) しかし、長年詳細に渡って知悉すべく研究してきたこの重要な問題について、いずれ私見を披露せねばならぬと
きが来ることは分かっていました。というわけで、この機会を利用しようと思ったわけです。

ブルターニュの民謡の真正性について語ろうとすると、『バルザズ・ブレイス』とその著者に言及しないことは不可能です。むろん、私もこの両方について語るつもりです。しかし節度をわきまえ、感情的な偏見を交えず、それこそ二千年前の書物や著者を論じるように語るつもりですのでご安心ください⁽²⁸⁾。

リユーゼルは手紙の末尾に相手が返事を書く場合に備えて、今後の予定と居所を丁寧に書き記していた。が、にもかかわらずラヴィルマルケからの返事はなかった。六月五日、リユーゼルはルナンにこう報告する。「ド・ラヴィルマルケ氏は私の手紙に返事をくれませんでした。けれども私の手紙は大変丁寧なものでしたし、たぶんこの点で彼が腹を立てることはなかったと思います。一方、彼はサン・ブリューの大会の議長にはきちんと手紙を書き、こう伝えていたのです。自分は大会には出席しないし、原稿も何も送らない、と。しかも理由や説明は一切なしに、です。この振る舞いは私にはひどくきこえないものに思われます。これでは戦わずして負けを認めているようなものです⁽²⁹⁾」。

しかし、きこえなかったのはラヴィルマルケの態度ばかりではなかった。サン・ブリューに到着したリユーゼルは、今度
は原稿の査読者からそれを大会で読み上げるのを止めるように説得される。再びルナン宛の手紙を引こう。「レンヌ大学の歴史学教授であるモラン氏が、私の論文の素読を任されていたが、四日間それをずっと手元に置き、『あなたは相手を

やり込めている』『彼のことは皆どこで止めればいいのか分かつていない』『地上の敵には寛容でなければならぬ』などと言つて、私にそれを読むのを思い止まらせようとしていました。私は言い過ぎていたり過度に表現が辛辣なところがあれば和らげるに吝かではないが、内容を変える気はないと答え、その上で、この問題はプログラムに載っており、私は長くそれを研究した末に自分の視点で論じるのであり、他の人が正反対の主張をしても全然かまわないし、聴衆も正反対の議論を聴いて、なぜそうなるのかを認識して自分の判断を下せばよい、などと付け加えました⁽³⁰⁾。

結局、原稿が戻ってきたのは、ようやく発表の当日であつた。リューゼルはそれを文学・哲学・美術等をテーマとする第五部門で読み上げた。「聴衆は興味深く耳を傾けていました。大方の反応はまず驚いたという感じでした。幾らか抵抗もありました⁽³¹⁾」。が、発表自体は聴衆からの若干の意見と質疑応答があつただけで何事もなく終わった。騒動が起きたのは、夜の総会の席で第五部門の書記が慣例に従つてリューゼルの発表のレジュメを読み上げた後であつた。その様子をリューゼルはこう伝えている。

有能な若者であるポカール・ケルヴィレ氏の報告はとてもよくできており、明確かつ簡潔で発表の意図をきちんと汲みとつたものでした。彼が報告を終えたとき、モラン氏が立ち上がり、この報告は大会のメンバーであり、有力な人物であるひとりの欠席者を攻撃し、痛罵するものであるので、大会の報告集には印刷しないで欲しいと発言しました。大会の前会長で書記長であるユゲ氏も同じ趣旨の発言をし、その後エマール・ド・プロワ氏が続きました。彼は前の晩にこの問題に關しては中立を守ると約束し、ド・ラヴィルマルケ氏の悪意の新たな証拠を提供してくれてもいたのですが。一方、エヴルーのレイモン・ボルドー氏なる初対面の学者は私を擁護し、このような労作を削除するということはできないと言つてくれました。会場で実際に読み上げられ、プログラムに記載されている問題を扱い、大会も公正で礼儀を弁えたもので

あるのに、等々というわけです。彼はサン・ブリュー裁判所長とサン・ブリュー司教から熱い賛同を得ました。そのときから形勢は私にとって有利になり、この報告も報告集に掲載されることが決まったのです。ただし大会は法廷ではないので、そこに書かれた判断についてはその責任はすべて発表者にあり大会は関与しない、という但し書きを付けるという条件ですが。大会が発行する冊子に私の論考が掲載されることはないでしょう⁽³²⁾。

総会の後、リユーゼルは彼を支持したサン・ブリュー司教ダヴィッド猊下から、原稿をそのままの形で出版したらどうかと助言される。最初に彼が考えたのは、アンリ・ゲドスに頼んでどこかパリの雑誌に掲載してもらい、抜き刷りを三〇〇部要求することであった。が、結局その原稿は同じ年の内に『ド・ラヴィルマルケ氏の「バルザズ・ブレイス」の歌の真正性について』*De l'authenticité des Chants du Barzaz-Breiz de M. de La Villemarqué* という小冊子として出版される。「前書き」でリユーゼルは出版に至った経緯をこう説明していた。

ある種の会議や協会や集会などでは、反論してはいけなような人がいて、その人の間違いや誤謬は隠さねばならないことになっているらしい。私はそんな風に考えたり行動したりすることはできない。なぜなら、こうしたシステムでは、無欲でひたむきな真理の探求がまったくの幻想に、正真正銘の欺瞞になってしまふからだ。私がサン・ブリューの大会の執行部によって拒否された自分の論考を（……）公にするのは、読者がそれを読んで判断し、ブルターニュ民謡の真正性というこの重大な問題を、これまではひとりの証人しかいなかったこの問題を、新たな資料に基づいて学べるようになってほしいからなのである⁽³³⁾。

（つづく）

註

- (1) ペングエルンが民謡収集を始めた時期は論者によって相違がある。彼に関して信頼のおける伝記を著した Yves Briand は一八三〇年—四〇年の間として、F. Gourvil は一八三六年としている。Cf. Francis Gourvil, *Théodore-Clau de-Henri Hersart de la Villemarqué et le «Barzaz-Breiz»*, Oberthur, 1960, p.302.
- (2) このうち一部は Madame de Saint-Prix から寄贈された歌であると伝えられる。Cf. Jean Marie Penguern, *Dustumad Penvern*, Dastum, 1983, p.15.
- (3) Théodore Hersart de La Villemarqué, *Barzaz-Breiz, Chants populaires de la Bretagne*, Charpentier, 1839, xiv. また拙論『ラヴィルマルケとリューゼル(一)』、鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」第57号、七五頁も参照のこと。なお、リューゼルはペングエルンが詩人の Guillaume-René Kerambrun 等を助手として雇ったことから、彼がブルトン語をあまりできなかったと断言しているが、これには異論もある。Cf. Jean Marie Penguern, *op.cit.*, p.17.
- (4) この『フランス民謡大観』とでも呼ぶべき書物は、一八三〇年代半ばに時の国民教育相のギゾーが発案したものであった。サルヴァンディーからこの歌集への協力を依頼されたスーヴェストルがペングエルンと知り合うのは一八四六年か四七年。スーヴェストルは早速ペングエルンに書物への協力を請う。が、スーヴェストルがその後四八年と五一年の政変によってこの計画から身を引いたのに対し(彼は五四年に死去)、ペングエルンはこの計画を引き継いだナポレオン三世の下でも収集を続けた。
- (5) Pierre de la Villemarqué, *La Villemarqué, sa Vie et ses Œuvres*, Champion, 1926, p.176.
- (6) *Ibid.* なお、この手紙の末尾には次のような興味深い記述が見つかる。「ゲウェン克蘭 Gwenkian をまた見つけたかとお訊ねですが、私の答えはどちらでもないというものです。三〇年ほど前にわれわれの田舎で人々の間に伝わっていた手稿はその後目にしていませんが、それを読んだ人は山ほど知っています。なかには私にその一部や意味など教えてくれる人もいました。歌集に載せませんから見てくださう」(*Ibid.*, pp.176-177)。
- (7) *Ibid.*, p.178.
- (8) Pierre de la Villemarqué, *op.cit.*, pp.178-179.

(9) これについては拙論『ラヴィルマルケとリュール(四)』、鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」第62号、三八頁―四〇頁を参照のこと。

(10) Françoise Morvan, *François-Marie Luzel, Enquête sur une expérience de collecte folklorique en Bretagne au XIX^e siècle*, Terre de Brume-Presses Universitaires de Rennes, 1999, p. 166.

(11) Jean Marie Penguern, *Dustumad Penvern*, Dastum, 1983, p. 22.

(12) *Ibid.*, p. 24.

(13) *Ibid.*, p. 25. 一方、リュールは一八六七年二月三日付でデュ・クルジューにこう書く。「実際のところ、この人たちは何を望んでいたのでしょうか。たぶん貴重な資料を所有することですが、そのわりには彼らはそれを軽視し、秤にかけて捨て値で、たとえば一リーブル二〇フランという値段で買おうとしていたようです。私たちは彼らに十分な時間をあげたつもりです。ルスクール氏は一年以上も交渉していましたが、あときにはド・ペンゲルン夫人も彼女の権利の代理人も、この資料が例の人たちのものになるということをし、とりわけ彼らが主張する条件で彼らの手に落ちるということをしを望んでいなかったのは明らかでした。そのときはじめて、私はあなたに介入をお願いしたわけです。私だけの名前ではなく、あなたの名前で、またより広く本当に心からあなたがたのブルターニュ文学に関心をもつすべての人たちの名前を」(*Ibid.*, p. 24)。

(14) *Ibid.*, p. 28.

(15) *Ibid.*, p. 32.

(16) *Ibid.*, p. 41.

(17) たとえば、リュールは一八六八年九月八日付でルナンにこう語る。「パリでは共感や激励がありますが、ここにはそんなものはありませんし、小さな地方紙は私の本の広告を出すことさえしませんでした。『ルヴェ・ド・ブルターニュ・エ・ド・ヴァンデ』に私は序文を転載するようお願いしましたが、削除されてまるで別物になってしまいました。直接的にせよ間接的にせよ、ド・ラヴィルマルケ氏に関することはすべて削除されました」(*Correspondance Luzel-Renan*, Presses Universitaires de Rennes/Terre de Brume, 1995, p. 147)。さらに同年十月二五日の手紙には、アルヴォア・ド・ジュバンヴィルの情報としてこうある。「彼とルメーンと私は『カンパールのブルトン人』で二号にわたって激しい攻撃にさらされており、彼は反論したがっているのですが、私はこ

うした連中とことを交えるのは控えた方がいいと思っています。彼らはトレギエやラニオンやカンペールやブレストなどの書店に私の本を売るのが禁じたのです！」(Ibid., p.154.)

(18) Francis Gourvil, *Théodore-Clau de Henri Hersart de la Villemarqué et le «Barzaz-Breiz»*, Oberthur, 1960, p.204.

(19) *Correspondance Luzel-Renan*, p.351-352.

(20) 「ひと言だけお知らせがあります。昨日今年私が副委員長を務めるアカデミーのフランスの古文化財に関する委員会が、全部で三つある五〇〇フランの金メダルの中のひとつをあなたに授与することを決めました。金額は大したことはありませんが、かなり名誉な褒賞です。」(Ibid., p.164.)

(21) *Ibid.*, p.152.

(22) *Ibid.*, p.159.

(23) *Ibid.*, pp.161-162.

(24) *Ibid.*, p.162.

(25) リューゼルの仕事がいかに妹ペリーヌの協力に多くを負っているかについては、たとえば F. Morvan, *op.cit.*, pp.171-178を参照。

(26) *Correspondance Luzel-Renan*, pp.167-168.

(27) Cf. *Ibid.*, p.179. なお、Milin はリューゼルが民話集を出した同じ一八七〇年、ブレストの出版社 Lafournier から民話集 *Ar Marvailher brezounek* を出版している。

(28) François-Marie Luzel, *De l'Authenticité des Chants du Barzaz-Breiz de M. de La Villemarqué*, F. Vieweg, 1872, I - II.

(29) *Correspondance Luzel-Renan*, p.197.

(30) *Ibid.*, p.199.

(31) *Ibid.*

(32) *Ibid.*, pp.199-200.

(33) François-Marie Luzel, *De l'Authenticité des Chants du Barzaz-Breiz de M. de La Villemarqué*, V-VI.